

## 当事者である若手が考える若手研究者のあり方とキャリアパス

江間 諒一

日本学術振興会特別研究員 PD、芝浦工業大学

平成 26 年、日本体育学会内に設置された「若手研究者育成」小委員会が、体育系若手研究者(40 歳未満の体育学会所属研究者)の生活や研究環境の実態を把握するためのアンケート調査を行った。その報告書によれば、多くの若手研究者が、研究職のポストが少ないと感じている。一方、特に任期付教員においては、その多くが研究職以外の職につくことは考えられないと述べている。この若手研究者のキャリアをめぐる閉塞感は多くの人を感じていることだと思うが、先のアンケート調査の有効回収率は 29%と、決して高いとはいえない。この閉塞感に突破口を見出すため、研究職に至るまでの過程に焦点を当て、若手研究者が当事者意識を持ち、主体的かつ

づくばらんに議論する機会が必要ではないかと考えた。大学院生やポスドクにとって、多くの場合身近に存在する研究職は大学教員だが、それ以外にも研究職ポストは存在する。また、研究職を目指す過程において、キャリアモデルが身近にいなかったり、悩みを相談することが難しかったりすることがあると思う。今回、ユニークな経験を積まれている若手研究者の先生方 3 名に登壇をお願いした。それぞれのご経験が、キャリアプランの中で、どのような役割を果たしているのかについてご紹介いただく予定である。学生か有職者かといった立場にとらわれないことなく、ご参加いただいた皆様が自身のキャリアプランを再確認する機会になれば幸いである。

### シンポジウム 1-1

#### アスリーートのセカンドキャリアと女性のキャリアパス・キャリアプラン

相馬 満利

十文字学園女子大学、日本体育大学大学院

日本体育大学を卒業後、群馬県高崎市にある「ルネサスエレクトロニクス高崎女子ソフトボールチーム（現：ビックカメラ）」の実業団に所属し、日本一、世界一を経験した。引退し、自分の市場価値を高めることや経験の幅、知識の幅を広げることがこれから強みを売りに生きていく上で必要ではないかと考えた。選手としてよりも一社会人として過ごす方が圧倒的に長く、ズルズル競技を続けるより、比較的早く決断できたことはよかったかもしれない。ソフトボールしかやってこなかった人間が日本体育大学大学院に進学を決め、科学の世界に足を入れることになったが、知識が極端に欠けていた。まず言葉や意味がわからず落ち込んだときもあった。しかし、

ソフトボール競技者として過ごしてきた日々が今の自分を支え、また、たくさんの人に出会い、たくさんの人に助けてもらい今の自分がいる。選手と研究・教育の分野では全くの別次元という認識であったが、実はとても似ているのかもしれない。たとえば、競技で培った経験やストイックに物事をやり遂げる力、物事の優先順位や段取りをつけることなど共通する。選手の頃は「夢や憧れ」にならなければいけない立場であったが、指導者や教育者としては「夢や憧れ」といった善意だけが次世代を担う子どもたちに伝わり結果的にアスリートへの選択肢を狭めてしまう可能性を防ぐためにも、私の強みでもあるアスリーートの立場の経験を発信していきたいと思う。

## シンポジウム 1-2

### まず実践、そして研究

水島 淳

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士前期課程に所属している手前、「研究者のあり方」について言及することは大変恐縮ではあるが、私から見た陸上競技、スポーツに関連する学問分野を専門とする大学教員の現状を踏まえて、ここでは理想を掲げたい。

陸上競技、スポーツに関連する学問分野を専門とする大学教員は、研究者としてのみならず、マルチな役割を担っているように見受けられる。代表例として、「日本における近代陸上競技の父」と呼ばれた野口源三郎先生は選手を経て、指導者（コーチ）、教育者、経営者（日本陸上競技連盟専務理事）、そして研究者として陸上競技の発展に大きく貢献された。現在では、尾縣貢先生も同様の

役割を担い、多大なるご活躍をされている。このように、研究者である前に多方面での実践者であることは明白であり、「まず実践、そして研究」という、実践（現場）に重きを置いた心構えあるいは姿勢が重要だと考えられる。

「吾れ十有五にして学に志す」論語の中で孔子がご自身の学問求道のプロセスを述べられた一句がある。随分遅れ馳せながら、私も「陸上競技、ひいてはスポーツを通じた豊かな社会づくり」の一端を担うという志を持ち、実践に軸足を置きつつ、研究活動を続けていきたいと考えている。

## シンポジウム 1-3

### スポーツメーカー研究者のキャリアパス

阪口 正律

株式会社アシックス スポーツ工学研究所

現状、多くの大学院生や博士研究員にとって、最も身近な研究職は大学教員であり、学位取得後のキャリアパスは、助手などのアカデミックポストに就き、研究を続けるというのが主であろう。しかし、それ以外にも研究職ポストは多く存在する。自らの研究成果や大学院で培った能力を社会に還元していく上で、企業研究者も一つの研究者キャリアの選択肢である。特に、スポーツ関連分野の研究者にとって、スポーツメーカーは、研究成果を商品として消費者に還元できるというチャンスがある。私は、早くからスポーツメーカーでの研究者を志してきた。しかし、私の周囲にはそのようなキャリアモデルになるような研究者はおらず、自分なりの分析とキャリアデザインを行ってきた。日本で博士号取得後に、海外の

大学で博士研究員として経験を積み、現在は民間企業で研究者として働いている。こういったキャリアパスは、日本では珍しいかもしれないが、世界に目を向けてみると、民間企業での研究職という将来像を具体的に持ち、それに向かってアカデミックで経験を積む、というキャリアパスを歩む人は、決して少なくない。そういったアカデミック以外の研究職に就くために、自身が歩んできたキャリアパスや、海外で得た経験などについて説明する。自身のキャリアパスが、若手研究者のキャリア選択の一助となれば幸いである。